

旅

一、二、丙 武下 一郎

汽船宿窓をひらけば沖つべに逆まく浪の眞白き
が見ゆ

船出でしあとの港の淋しさに獨り残りて海を眺
むる

窓さきに枝もたわゝと夏蜜柑實をつけたるが夕
陽にあかく。(以上春)

浦の子は懐しき哉共に泳ぐ我を先生かと話して
居たり

浪しづか浦のあなたを眺めつゝ今宵の泊りの町
をおもひぬ

宿驛の晝は眞淋し箱馬車の淺黄のとばり重くた
れたり

さねぐと鶏鳴くきこゆ朝霧の森のあなたに人
家あるらし(以上夏)

潮 鳴

二、三、甲 一 莊島 秩男

ほのぐらき連絡船のかたすみに潮なりをさく夜
をあさみかも

港街ゆふべほのかに霧こめて汽笛さびしく空を
ながるゝ

かもめとぶ馬關の海はやゝあれてゆきこふ船に
風さむみかも

雑

一、二、丙 本 田 保 章

夕暮の稻葉の河の瀬を高め逝きにし人を思へば
詮なし(友の死を悼みて)

嵐する空に響きぬ入相の鐘は消ぬがにかすかな
れども

温かき夜具にうもれて今宵また父母の恵を新に
ぞする

地 顔

暮れかゝる筑紫の曠野に停れるわが車ぬち静も
りにけり
さや〜と小笹なる聞ゆさ庭への真紅のぼけの
かすかにゆるゝ

折々の歌

さゝき生

夕されば憂ひ心のすべをなみぶらりと宿は出で
にけれども
ぼつねんと向家の門に立つ小犬我が顔そつと覗
きけるかも
憂ひ來しこゝの場末の獄屋あと礫投ぐれど慰ま
ぬかも
かゝる時まこと吾を知る一人あれや身を投げ伏
して泣かんと思ふ
狂はしや高笑ひしてうち仰ぐ五月雨空の黒雲の
かけ

五月雨のはれ間を乳の桶かつぎ牛舎を出づる素
足の女
けものの香たゞよう牧場にはつかもと白き月出
で夕さりにけり
あひ住みの友出で去りし空き部屋にぼつねんと
してあが立つ夕べ